

記録  
35ミリ  
カラー／30分  
日・英語版

- 企画  
(財)ポーラ伝統文化  
振興財団
- 監修  
岡田 譲

スタッフ

- 製作  
六鹿英雄  
村山和雄
- 脚本・演出  
村山英治
- 撮影  
金山富男
- 作曲  
山内 忠
- 解説  
加藤治子

文部省選定 第36回芸術祭優秀賞 第36回毎日映画コンクール教育文化映画賞 第19回日本産業映画コンクール日本産業映画賞 1981年キネマ旬報文化映画ベスト・テン第3位

映画『沖縄の母たち』から10年後、再び沖縄を撮影する機会がめぐってきた。映画は、沖縄で最初に国の重要無形文化財の指定を受けた芭蕉布を織る女たちを描く。芭蕉布は、工業製品に押され、戦禍で荒廃してしまった村の片隅に細々と残っているに過ぎなかった。それが、昔ながらの産地のひとつ、沖縄本島北部の大宜味村喜如嘉(きじよか)で、平良敏子さんを中心にして見事に復興した。



芭蕉布は、原料になる糸芭蕉を栽培し刈り取って、その茎から繊維を引き出して糸にし、柄を考えて紺くりをして染めるといった様々な工程を経るが、織り上げるまで一貫して女性の仕事である。芭蕉布の復興を支えた平良敏子さんの工房では若い女性たちが、また村ではお婆さんたちが、紡ぎ、染め、織り上げる作業を続けている。

昔は若い頃には織り、年をとると畑で糸芭蕉を栽培し、老婆になると糸を紡ぐというふうに年齢的な分業が行なわれたが、工房では若い女性たちにはまず織る喜びを教え、それから少しずつ地味な糸づくりを習わせる。織り場の裏手には染めの小屋がある。染めは苦勞の多い下積み作業である。軒下には、藍の壺がいくつもあった。芭蕉布の色は主として藍だが、茶などが交じることもある。平良さんは、計算の必要な紺くりは民家に出向いて経験のある年配の女性たちと一緒にやっていた。村には自分の芭蕉畑を持ち、機も持って好きな柄を織っている老女たちもおり、平良さんはその染めも引き受けて、織り上がったものは「喜如嘉の芭蕉布」として共同出荷している。平良さんは今や染織作家として知られているが、自分の名をつけることは拒む。平良さんの作品も、村でお婆さんたちの織ったものも、等しく連帯の手わざが生んだ「喜如嘉の芭蕉布」である。